

JSL バンドスケール

JSL Bandscales

JSL バンドスケールとは何か

JSL バンドスケールは、「日本語を第一言語としない子どもたち」(JSL 児童生徒)の日本語能力を把握するために開発された「測定基準(ものさし:scales)」で、その「ものさし」は一冊の冊子にまとめられています。

このバンドスケールは、子どもの日本語能力をきちんと把握し、その言語能力にあった日本語指導を考えるために川上研究室が開発しているものです。

どのように使用するか

この「ものさし」の全体の構成は表1のようになっています。実際にJSL 児童生徒の日本語能力を測定する場合は、その子どもの学習の様子や先生とのやりとり、クラス活動や遊びの様子などをよく観察し、そこで見られる言語使用の特徴がJSL バンドスケールのどのレベルの特徴と合うかを検討し、そのときの日本語能力のレベルを測定します。

表1 . JSL バンドスケールのフレームワーク

年齢集団	4 技能	測定段階(レベル)
小学校低学年	聞く	1・2・3・4・5・6・7
	話す	1・2・3・4・5・6・7
	読む	1・2・3・4・5・6・7
	書く	1・2・3・4・5・6・7
小学校中高学年	聞く	1・2・3・4・5・6・7
	話す	1・2・3・4・5・6・7
	読む	1・2・3・4・5・6・7
	書く	1・2・3・4・5・6・7
中学高校	聞く	1・2・3・4・5・6・7・8
	話す	1・2・3・4・5・6・7・8
	読む	1・2・3・4・5・6・7・8
	書く	1・2・3・4・5・6・7・8

各レベルの内容は

各レベルには 以下のような内容がまとめられています。

日本語習得上の諸特徴

日本語を使用するときの特徴

誤用例

学習者のストラテジー

言語と認知発達上の諸特徴

教育歴や母語の影響など。

その例を表 2 , 表 3 (次頁) に紹介します。

このバンドスケールは言語能力をどう捉えているか

JSL バンドスケールの基本となる第二言語能力観は Bachman & Palmer (1996)の第二言語能力モデルを基礎としています。そこでは、

「言語知識、ストラテジー能力、メタ認知的ストラテジーを含むもので、話題の知識、情意スキーマ、言語使用の状況などとの相互作用的枠組の中で言語を使用する能力」

表 2 . 試案：小学校低学年の「話す」レベル 1 に関する内容

小学校低学年 話す レベル 1	
全般的特徴	初めて日本語に触れる。単語を言ったり、他の人の言葉をそのまま繰り返したりする。第一言語による社会的知識に頼り、第一言語と日本語の一部を使う。ただし、個人差はある。
第二言語習得のストラテジー および言語運用上の特徴	<ul style="list-style-type: none">・ ものの名前を言ったり、単語を言ったりする。・ 直接的な要求をするための語彙に限られる。・ 大人や他の子どもが言った単語や句をそのまま繰り返す。・ コミュニケーションを図るためにジェスチャーを使う。・ 一語文、二語文で意味を伝えようとする。例：「その本、見せて」「この本、読んでもいい？」などの意味で、ただ「ほん」と言う。・ 日本語母語話者の子どもに第一言語で話しかけることもある。・ 学習活動の中で、ジェスチャーで応えたり、他の人の行動を真似たりすることがある。・ 他の子どもがすることを注意深く観察するが、話さない場合もある（沈黙期間）。
追加情報	<ul style="list-style-type: none">・ 第一言語で話す経験や第一言語から得た知識が「話す能力」を育成する。・ 家庭や第一言語を話す友だちの間では、第一言語を、自信を持って話す。

表3．試案：小学校低学年の「話す」レベル2に関する内容

小学校低学年 話す レベル2	
全般的特徴	日常生活でよく使う決まった日本語表現を理解し始め、身近な環境で日本語を話すことを試み始める。第一言語と日本語による社会的知識に頼り、第一言語と日本語の一部を使う。ただし、個人差はある。
第二言語習得の戦略 および言語運用上の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 挨拶など日常的な習慣の言葉を使い始める。 ・ ジェスチャーや実物に頼ってコミュニケーションを行い、それを分かってくれる人と行動をともにする。 ・ 周囲に伝えたい意欲がみえ、言葉を使うようになる。 ・ 質問や他の子どもの発言を真似ることがある。 ・ 物語や詩、歌にある短い語句を繰り返すような活動に参加することができる。 ・ ものの名前や出来事に関する語彙が増える。 ・ 意味を伝えるために、日本語のイントネーションなどを使い始める。 ・ 自分勝手に語句を組み合わせてたりする。 例：「じゃない、じゃない」「きれくない」 ・ 瞬時の反応やグループ活動へ参加するといった外部からの刺激がある場合は、話すことよりも行動で示す。 ・ 自ら何かコミュニケーションをとりたい場合にも、肩を叩くなどと行動で示すことがあり、時には「乱暴」な印象を与えることがあるかもしれない。
追加情報	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ第一言語を話すクラスメイトがいる場合は、そのクラスメイトと第一言語で話す。 ・ 第一言語による社会的知識で学校のクラスの出来事についての意味を理解したり、予測する。

と定義されている。つまり、第二言語能力とは、母語で得た言語能力や言語知識、コミュニケーション体験、および第二言語の知識や第二言語を使ってコミュニケーション活動を行おうとする全人的な能力をいうのです。

具体的に言えば、それは、話し手が自己の置かれている状況や直面している場面、また話し手と聞き手の関係性を把握し、適切と考えられる方法で聞き手や周囲の人々との関係を取り結ぶために第二言語を使用する能力と言えます。したがって、その能力とは総合的な言語能力ということになります。

どうして、そのような言語能力観が必要か

JSL 児童生徒を指導する日本語指導者にとって、どのような言語能力観を持つかは極めて重要です。なぜなら、日本語指導者の言語能力観がその日本語指導の方法や評価に直接反映

されるからです。

たとえば、漢字力や書字力が日本語能力の重要な部分を占めると考える日本語指導者は漢字指導や書写だけを指導し、漢字や書字学習の結果がその学習者の日本語能力であると判断するかもしれません。また、その場合、漢字指導や書字指導だけが年少者のための日本語指導であると考えられることになるかもしれません。果たして、そうでしょうか。

JSL バンドスケールを使うことによって、日本語指導者の言語能力観をもう一度捉えなおしてほしいのです。

テストのように点数化できるか

JSL バンドスケールの中の「測定する項目をレベル毎に限定して、それぞれの項目を点数化した方が測定しやすいのではないか」というコメントをいただくことがあります。しかし、それは、言語能力を項目で分け、点数化できるものという言語能力観の反映したコメントではないでしょうか。あるいはまた、日本語を母語とする子どもたちと同じ「国語テスト」を使って日本語の力を測ろうとする日本語指導者がいるかもしれません。その場合、文法理解力や文章内容把握力等を、JSL 児童生徒の言語能力として考えているのではないのでしょうか。

しかし、その場合の第二言語能力は日本人母語話者に求められる「国語力」あるいはそれとの比較によって想定される「言語力」と考えられていると言えるのではないのでしょうか。果たして、そうでしょうか。

これらはいずれも、JSL バンドスケールの基本となる第二言語能力観とは異なります。JSL バンドスケールでは、前述のように、漢字力や書字力だけを「日本語能力」とは考えません。また、ペーパーテストのように、点数化することで「日本語能力」を測定することをめざしていません。なぜなら JSL バンドスケールの基本となる第二言語能力観は、子どもたちが第二言語を使用して、異言語社会で他者との関係性を築こうとする総合的な言語能力と見るからです。

なぜ JSL バンドスケールは「記述的」なのか

たとえば、JSL バンドスケールには、次のような記述があります。

「他の子どもがすることを注意深く観察するが、話さない場合もある（沈黙期間）」

〔小学校低学年・話す・レベル1〕

「考えや意味などを確かめるために、同じ第一言語を話す友だちや大人とは第一言語を話す」

〔小学校低学年・話す・レベル3〕

「自分の知っている語句を使ったり，非言語の使用（微笑み，うなづきなど），回避ストラテジー（勉強しているふりをする，忙しいふりをするなど）によって，理解できないことを隠したりする場合がある」
〔小学校中・高学年・聞く・レベル3〕

「メタ言語（語・文字・ページ・題名などのような，読みに関する用語）を日本語で理解している」
〔小学校中・高学年・読む・レベル3〕

「日本語における広い基礎的な知識が増え，日本語で流暢に話すようになってきているので，書くことにおいても，かなり速く滑らかに書ける。間違いを恐れず書いている。最初に書き出したときに間違いがあって，それを知りながらも，書きたいことを書き続け，テキストを完成させることもある。」
〔小学校中・高学年・書く・レベル4〕

どうして，このような記述になるのでしょうか。それは，JSL 児童生徒が持つ第二言語能力を社会的な文脈の中に位置づけて把握しようとするからです。

JSL バンドスケールの考え方について詳しく知りたい方は，以下の拙論をご覧ください。

川上郁雄 (2003) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田大学日本語教育研究』第2号 早稲田大学大学院日本語教育研究科